

# 発達障害 体感し理解を

## 愛教大生がワークシヨップ

刈谷市の愛知教育大で、コミュニケーションや環境適応などに支障が生じる発達障害について、学生らが疑似体験するワークシヨップがあった。

普段使わない左手用のはさみで、愛知県の地図を切り抜くワークシヨップ。大学院生の一人はきれいに切れず、「細かいところで思うように進んでくれない」ともどかしさを語った。

右利きが多いという「多数決の原理」で社会がデザインされていることを知り、発達障



発達障害を疑似体験する学生たち＝刈谷市の愛知教育大で

害のある児童が日ごろ「差」を体感する試み。視から感じる「社会との野が狭い特性を持った

児童が感じるストレスなども疑似体験した。講師を務めた三谷聖也准教授（家族心理学）は「微妙な差でも、日常的に感じる子どもには大きなストレス。発達障害は個人の特性だけでなく、社会にある障壁が関係する」と解説した。



四月に施行された障害者差別解消法をきっかけに、心理学を学ぶ学生や院生のグループが、教員を目指す他の学生とともに考えるために企画した。

グループの代表で特別支援学校に勤務経験がある大学院一年の太田綾さん（三）は、発達

障害について「周囲からは見えにくく、何が問題なのか理解されにくい」と指摘。「法は整備されたが、中身はこれから。全ての学校で障害のある子どもたちが支援を受けられる環境になってほしい」と期待した。（土屋晴康）